

はじめに

報告を兼ねて感謝



(財)元興寺文化財研究所創立40年を期して、記念論文集を発行することができました。これひとえに、執筆者の先達諸兄や現役研究員の労であり、ご支援下さった関係各位のお蔭と有難く深く感謝いたします。

当研究所の歩みについては、前回『創立三十周年記念誌(1967～1997年)』のなかで詳細にわたって述べられていますので、その後10年間について御報告致します。

平成9(1997)年12月、創立30周年事業として、郵政省お年玉付郵便葉書等寄付金事業「元興寺文化財研究所増改築事業」が完了しました。これは、本部所屋の老朽化の改修、文書等の保存修理作業室の増築整備と、室内と外観の部分的改装工事でした。

平成10(1998)年12月、ユネスコ世界遺産会議において『古都奈良の文化財』が世界遺産に決定されました。その中で、元興寺の登録については、文化財保護法による各種の解体修理等補助事業や、国関連機関を主とする科学研究補助による総合研究の成果の賜であります。それらを継承した当研究所の調査研究の実績が評価されたとも考えられます。

平成11(1999)年11月、岩城隆利先生(三代目所長)は既編の「元興寺編年史料」や関連する諸研究の成果も踏まえて、飛鳥寺の創建から、元興寺の世界遺産登録に至るまでの通史を『元興寺の歴史』(吉川弘文館)として公刊されました。

平成12(2000)年10月、文化財保護法50年記念に当たり、当研究所は、文化財保護に尽力し、多大の功績を上げたとして、文部大臣表彰を受けました。また同年11月より、元興寺は、国庫補助事業『国宝元興寺極楽坊本堂ほか防災施設事業』を開始し、平成14(2002)年5月に完了しました。この間、研究所と保存会は連携して、元興寺と合同で勧募活動、関連整備事業も行いました。つまり、これらの事業は一種の記念事業的なものとなったのです。

一方、平成12年の行政改革大綱の決定から、平成16(2004)年の日本育英会の解散、公益法人制度改革などの取り組みがなされるなか、当研究所は文化庁記念物課所轄の財団法人で、日本育英会法に基づく試験研究法人から、新たに平成17(2005)年6月、特定公益増進法人に認定されました。公益法人制度の抜本的改革が進むなかで、今後は公益財団法人としての諸要素を満たすべく努力せねばならないでしょう。そこで、公益性の具体的説明責任と高度の専門的な知識経験を有する研究(研究員と実績)の必要性が大きくなるでしょう。

以上のような経緯の中で、当研究所創立40周年の記念事業として論文集の発行に至りましたことを付言致しました。ご理解を賜りますようお願い申し上げます。

理事長 辻村 泰善

序



元興寺文化財研究所発足40周年を迎えるにあたり研究所員一同による研究論文集を発刊することとなった。顧みれば1961年元興寺極楽坊本堂前の防火用水槽設置のための発掘で多量の埋蔵木製文化財が検出された。その保存処理に水野正好君が手探りのなかで苦労されました。その当時埋蔵木製品の保存科学的処理は東京国立文化財研究所で静岡市登呂遺跡出土品をPEG1000で処理しておられる程度で、十分な体制ではありませんでした。

1967年先代辻村泰園住職の英断で仏教民俗資料研究所が文化財保護委員会認可財団法人として設立され、69年には人文、保存科学、考古三部門に拡張され、72年には保存科学の専門研究員が採用されて、78年に元興寺文化財研究所と改称されました。

研究所が認可された1967年に私は文部省の明治百年記念事業として文化財保護委員会提案の国立歴史博物館開設準備の一貫としてヨーロッパ各国の歴史博物館の調査を命ぜられ、その仕事のなかでデンマーク、コペンハーゲンの国立博物館でバイキング船の保存処理担当のポロルセンクリステンセン博士から当時最も進んだ埋蔵木製品の処理法であるPEG4000浸透法、凍結乾燥法の実情を見せてもらいました。早速博士を日本に招請し、さらに奈良国立文化財研究所職員を派遣し研修させてもらいました。わが国の出土木製品の処理の新段階がはじまったわけです。ちょうどそのころ全国の埋蔵文化財行政が充実しはじめ、各地で膨大な木製文化財が発掘され、その保存処理が大きな問題となりました。元興寺文化財研究所保存科学研究室にその窮状を救ってくれないかと文化庁記念物課担当者から要請があり、当研究所も各種団体の助成金で施設の拡充、各都道府県に対する文化庁補助金による埋蔵文化財出土品の保存処理が実施されるようになりました。この間、稻荷山古墳出土鉄剣金象嵌銘、出雲岡田山古墳出土象嵌銘の検出、藤井寺市三ツ塚古墳外陸出土修羅の修復等、研究所の業績が大きく評価される成果も得られました。これに加えて民俗資料の保存処理、絵馬、天井画等の彩色文化財の修理等も着実に実施しており、人文科学研究室での寺院各種資料の調査、報告書刊行から文書修復等、考古学研究室も石造物調査はじめ発掘調査等多岐にわたる研究に従事することになり、その成果の一部を本論文集で見いただければと考えております。厳しい御批評を賜りますよう御願い申し上げます。

所長 坪井 清足